

現代日本社会における趣味としての「アイドル」

—ジャニーズ・アイドルの女性ファンの考察より—

JIANG Nan

本論文はジャニーズ・アイドルの女性ファンの「おっかけ」を問題とし、その意味と現代日本社会における趣味としての「アイドル」の位置付けを考察してきた。

「予算はなくて、コンサートがある時に、彼が出てるコンサートだったら、大体一ヶ月まるまるあつたら、最低でも 10 万円から、もうちよつといく時もあるし、トータル一年間だったら、多分 150 万円ぐらい……」

これは 20 歳の女子大学生の話である。彼女は 6 歳の時にジャニーズ Jr. 林真鳥のファンになり、14 年におよぶファン歴を持っている。

彼女のように、アイドルを趣味として、たくさんの時間とお金をかける熱狂的なファンは一人に限らない。家賃や食料、交通費以外に、可処分所得を好きなことに使うことは決して不思議なことではない。しかし、彼女たちはどうして旅行や本や料理などではなく、アイドルにそのお金の使い道を選ぶのか。自分と無関係の人に大量の時間やお金を使う意義はどこにあるのか。ファッションなどのモノではなく、生きている人間を趣味の対象とするアイドルファンは、他の趣味を持つ人たちとどのような違いがあるだろうか。

本稿ではアイドルをめぐる「関係性」に注目する。ジャニーズ・アイドルのグループメンバーの間関係性、ジャニーズ・アイドルと女性ファンの間関係性、女性ファン同士の間関係性という三つの視点から、女性ファンの応援行為を読み解いていく。

また、本稿では一般的な「アイドルファン」として想定される男性のアイドルオタクではなく、女性の熱狂的なアイドルファンを研究対象者とする。なかでも日本の男性アイドル代表であるジャニーズの女性ファンを対象とし、彼女たちの私生活とは無関係のジャニーズ・アイドルに大量なお金と時間を使うということがどのような意味を持っているのかを明らかにする。さらに、この趣味がどのような社会的な「場」を作り出しているのかを探究する。

本稿の研究方法は主にインタビュー調査である。第一章ではさまざまな研究者が提示した日本アイドルの定義をまとめ、同じようにアイドルと呼ばれてはいるが、ジャニーズがそれらに当てはまらないことを示す。その疑問点を解明するために、次に“日本型”のアイドルとされる女性アイドルの発展の歴史とジャニーズの発展の歴史を整理しながら、ジャニーズ・アイドルの位置付けを明らかにする。第二章はインタビューの内容を利用しながら、ジャニーズとその女性ファンの応援行為を考察する。女性ファンは「現場にいる楽しさ」と「やればやるほど自己肯定感」が感じられるので、ジャニーズ・アイドルに大量のお金と時間を使い、応援する。さらに、お金を使うことにより、ファンの格付けをすることもある。また、女性ファンは単純にジャニーズ・アイドルの応援に没入するだけではなく、バーチャルの場で楽しんでいるというのも彼女たちの特徴である。つまり、女性ファンは、「疑似恋愛」・「疑似親子」・「疑似兄弟」のようなジャニーズ・アイドルと女性ファンの関係性やメンバー同士の友情や絆を感じ取り、カップリングすることや自分のアイデンティティと一致するファンと新たな「親密圏」を築くことなどを楽しんでいる。また、このような関係性の中に、女性が主体となることも強調されている。第三章は社会的な視点から、インタビューの内容をもとに「アイドルを応援する」という趣味の位置付けを探究する。ジャニーズ・アイドルの女性ファンの中には、自分の趣味を楽しんでいる一方でそれを恥ずかしいと感じ、ファンであることを隠した経験を持っている者も存在する。現代日本社会において、「アイドル」というのは低級な趣味であると批判されることもあり、ファンの熱狂的な応援行為は、ファンでない人に「意味がわからない」、「見返りが無い」などと低く評価されがちである。しかし、ジャニーズ・アイドルの女性ファンは、自分の趣味に社会的な序列をつけることなく、趣味にのめり込む自分を認めていると考えられる。

女性ファンは、ジャニーズ・アイドルとのバーチャルな関係を楽しむことによって、トータルな自己を実現している。また、女性ファンはジャニーズ・アイドルを媒介とし、自分のアイデンティティと一致するファン同士と「親密圏」を作ることによって、同性同士の関係を築いている。したがって、ジャニーズ・アイドルという趣味は、社会におけるトータルな自己実現の場であると同時に、同性同士の連帯感を構築する場にもなっているのである。